慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カフカの「変身」における基礎的問題点について
Sub Title	On Kafka's Die Verwandlung
Author	黒岩, 純一(Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.120- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカの「変身」における基礎的問題点について

黒岩純一

「変身」は一九十二年完成、一九十五年十一月はじめて世に出たが当時はあまり注目されなかった。カフカの世界への影響は両世界大戦に挟まれた時代にはじまる。そして戦後のカフカ研究熱は周知の通り盛んであったが、それに伴い「変身」に関する解説も多数生れた。

これらの解説は概ね大きく二分され、主としてドイツ人解説者による形而上学的解釈とアングロ・サクソン系の解説者による心理学的解釈とにわかれた。前者に属する論文はその数も多く今ここで詳説はできないが、後者は大体傾向が似ていてフロイドの精神分析にたいする臆測された関係、あるいは事件の不合理性を強調する。両者は動物の像を形而上的な意味におけるよりも、心理的な意味において把握する点で一致するが他の点では当然のことながら互に矛盾し合い、何らの関連も見出せなかった。

ところが、「カフカ文学では社会的、世界観的、宗教的、哲学的、心理学的現象はもはや扱われていない、時間や空間の秩序すら解体せられている」[註1]、という見解が生れ、有力となるとカフカ解釈は全く混沌としてしまい変身の意味もますます難解となってしまった。

「カフカはもはや我われのノーマルな意識の観照形式、思考形式のなかでは活動しない。自然や歴史の具体的な世界は駆逐されてし

まったもののようである。カフカの文学を一定の宗教的概念、信仰内容、あるいは一定の社会的、伝記的現象に対する――純粋に経験的な意味で――映像とか寓意であるとは考えられない。[註2] (wilhelm Emrich)。経験的な思考方法ではもはや解説出来ないことがはっきりとした。その結果、内容や筋の関連を追求することをまったく断念した研究者もでた。[註3]

今や厳格なテクスト・クリティークの必要性が生れた。勿論こうした文学研究の初歩的手段が忘れられていたわけではないが、研究者の一部の間で軽視されていたことは事実である。しかし今、カフカがゲーテ、グリルパルツェル、ヘッベル、フォンターネ等の対話や日記に特に強い関心を抱いていたことが想起され、カフカが日記というものに特別な見解をもっていたことが指摘された。[註4]

一九十一年八月二十六日の日記。

「自分は彼を正確に叙述していると、ひとは考えるが、それは似通っているに過ぎず、日記によって訂正されるものだ。」

この文章はカフカ自身にもあてはまる、とバイスナーはいう。[註5]

カフカの日記には作品準備のためのノートや断章、散文の小品や小説のどこにも見られない自省がある。またカフカの性格のすべての面が彼の著作の中に一様に表現されているわけでもない。グロテスクで恐ろしい自己破壊的な像が圧倒的である。書簡、箴言、日記、さらに確実な思い出等が加わってはじめて纏まった像が生れる筈である。

一

カフカは晩年、自分の肺結核を「動物」とよんでいたが、カフカの作品における代表的な文学上の暗号 (Chiffre) としての動物は寧ろしばしば積極的な救助の意味をもっている。

「変身」の中の甲虫の比喩は一九〇六年～七年に書かれた「田舎の婚礼準備」の中の甲虫ラバンにその前例がある。

「それに、おれが子供の頃、危険なことをしようというときにやったような手を使えないものだろうか。おれ自身は田舎へも出かけなくてよいのだ。それは余計なことだ。おれは服を着たおれの体を送り出せばよいのだ。褐色のふとんをかぶって、窓を細目にあけた部屋を流れる空気にあたっているのだ。おれはベッドに寝ているとき、大きな甲虫か、それとも鍬形虫か、こがねむしの恰好をしてい

るのではないかと思う。」[註6] ここでは甲虫への変身は単に夢の中で、一種の冬眠の中で生ずる。「変身」の中ではこれに反して夢の中でのそのような勝利はもはや可能ではない。主人公グレゴール・ザムザは自分の夢の世界、無意識的な、自由な動物存在を受け入れることが出来ない。ラバンの夢の甲虫が人の心を落着かせ、自由にするのと対照的である。グリム童話の中の動物が危険な試煉や冒険に際して救助的な働きをするという童話的な子供の世界からははみ出て了っている。また童話の中では子供や愛する者たちがたちまち動物や物に変身することによって魔女や魔法使の追求から逃れることも出来る。カフカの動物の姿もその本来的なかたちにおいてこの積極的な救助の意味をもっている。その動物たちは意識下の夢の世界、思想をもつ以前の人間の状態、前人間的な、もしくは初期の人間的なもの、人間の魂の内部に常に共住するものを代表している。[註7] 甲虫の生活を職業（ザムザは仕事に全く嫌気を感じている）と家族の世界において疎外物、非存在物と化してしまった自我と同一視するエムリッヒは次のようにいう。「しかし現代の仕事は人間を脅かす。人間はそれにみづからを委ねているので、自分自身の救助者をも拒否し、救済を妨げる。

ザムザの運命の恐ろしさは彼の変身ではなくて、変身に会う際の盲目の状態である。」[註8] 彼の両親、彼の妹も盲目の意味を理解しない。変身したザムザの背後にカフカが居ることは明瞭である。Samsa と Kafka とは字数が同じ、a は同じ位置に繰返されている。S と k についても同じである。カフカのこうした好みは他の作品にも見られる。カフカ自身「死刑判決」の主人公 Georg Bendemann = Franz Kafka であることを日記の中で説明しているから理由のない類推ではない。[註9]

まず人間から動物への変身を同一性の喪失であるとする考え方がある。だが果してそうだろうか。第一に家族は恐ろしい姿に変ったグレゴールをやはり以前の息子、兄と考えている。（妹がこのおぞましい姿をした兄を〝Es〟とよんで拒けるのは物語も結末に近づいてからのことである。）同一性はグレゴールの側にもある。動物への変身は成程言語の喪失、食物の変化などになって表れるが、変身を意識することは純粋に人間的な意識であり、其の上、彼の環境に起る事件や会話を完全に理解することもできる。彼は甲虫に変ってしまってからも尚人間であった時と同様に、日常的な観念に規定されている。それ故、グレゴールたることを中止したわけではない。

物語はついにグレゴールの死をもって終る。だが死そのものは読者が好奇心をもって期待する種類の死ではない。それよりも事件の絶えざる悲喜劇的コントラストによって我われの内に生ずる不安がある。つまり、グレゴールの言語が通じないために起る家族の誤解

の反応が不安を生むのである。コムニケーションにたいする無益な試み――これもカフカ自身の大きな苦悩であった。[註10]

下等な生物への変身は人間の生物的な苦しみを惹き起した。それは此世の捕虜としての身分を象徴する、という考え方を生むかも知れぬ。あるいは、人間がここでは動物的な生活段階の原始性、幼稚性に陥っている、という議論がなされるかも知れぬ。[註11] しかしそのような解釈はすでに狭い正当性しか持ち得ない。というのは、この動物存在のプロセスに注目すると、そこに逆説的により高度な段階への精神的な発展が生ずる。殊にこの問題では食物と音楽の意味を指摘しなければならない。甲虫に姿を変えたグレゴールは、はじめのうちこそ食物を貪り食う。満腹した彼は窮屈なソファーの下から出てきて体をのばし、息をつく。しかしその快適さは次第に失われ、ついには口に含んだものを呑み下すこともなく、吐き出してしまうようになる。それは丁度食欲を感じながらも自分に適当な食物が無いために食べることが出来ない「断食芸人」に似ている。食事の拒否は次第に生命の弱さを招く。その結果は死である。カフカにとってどんなに食物が符牒的な意味を持っているかは他の作品においても観察される。食物はカフカにあっては単に食事という生物学的な意味のものではなく、それ以上の意味をもつ。飢え衰えた甲虫グレゴールは林檎によって受けた重傷の体をひきずって生きている。弱り果てたが今なら多くを認識することができるかも知れぬ。しかしこれ以上生きることは出来ない。

潜在的な意識によって罰を受けた者としてのグレゴール・ザムザはマゾヒズム的自虐や慰籍のない隔絶の中にカフカ自身の表情を示している。だが動物グレゴールは完全に霊的に崇高な領域に達する。この時、その領域は尚も彼の動物存在の積極的可能性に結びつけられる。そのことは就中妹のヴァイオリン演奏にたいする愛好（アフィニテート）に示されている。次の文に注目したい。

「これほど音楽に魅了されても彼はまだ動物なのだろうか？ グレゴールは憧れ求める未知の食物への道が示されているような気がした。」（E.130）

ここにはじめてこの動物変身の意味が明らかになる。つまり地上に存在しない未知の食物が問題である。彼は動物であるが今や同時に動物以上の存在である。彼の世間との絶縁が彼の内部にこの食物にたいする憧憬をよびさます意味をもっていた。変身以前のザムザが音楽にはまったく関心を示さなかったことがテクストには暗示されている。音楽はカフカにとって常に人間を一切の地上的な境界から引き離す可能性ともいうべきものであった。（例えば「或る犬の回想」）だがグレゴールを含めて登場人物の誰一人としてこの動物の

意味を実際に洞察してはいない。動物は決して理解されず、熟視もされていない。それは人間の一切の経験的な理解能力を超えているからである。甲虫ザムザを実際に甲虫として解説することは謬りであろう。カフカ自身このことをはっきりと記している。

Kurt Wolff がカフカの作品を出版する計画をたて Ottomar Starke に「変身」の挿絵を描かせようとした時である。カフカは一九十五年十月二十五日 Kurt に宛てて次のように書いてある。「ふと心に浮んだのですが、彼(O.Starke)が虫そのものを描くのではないかということです。それは困ります。どうかそうしないで下さいますように。彼の仕事の邪魔をする積りはありませんが、この物語にたいする私の見解からお願いしたいのです。虫そのものは描かないで下さい。」

グレゴールが求めるのは非物質的な、いはば精神的な食物であり、それはこの世では与えられない。しかし彼が非常に美しくも感じ、彼の心をとらえる音楽は恐らくそこに至る道である。音楽はここでは動物としての、あるいは人間としての捕虜としての状態を脱する救済の憧憬のしるしである。

更にまた思い出や歴史を失った生活を拒否する心も考えてみなければならない。グレゴールが自由に床や壁を這廻れるようにと母と妹が彼の部屋から家具を運び出そうとする。しかし子供の時代から学校生徒、商科大学生の時代を過ごした部屋である。思い出深い自分の道具類、机などを運び出されることはそれだけ早く人間的過去を忘れてしまうことを意味する。換言すれば „Ich" から „Es" への衰頽である。グレゴールは母と妹の善意を感じながらもはげしく妨害せんとする。社会的な意味ではグレゴールは役立たずの存在と化してしまった。

だがこのことは、彼の異常な状態が――別の観点からみた場合――再び積極的な可能性を潜在的に内蔵しているということを否定するものではない。これまで仕事と家族の重圧に押えつけられていた自我の力は解放される。しかし実際に変身者の意識の中に読者が体験するのは、かつての平均的存在への執着である。[註12] エムリッヒはハイデッガーの „man" に関する後期の概念をすでにここにみている。

「人間は完全に „man" に成ることはできない。この除き得ない自己、„man" に対する自己妨御が変身のかたちをとってザムザの日常の現実の中へ突然現れたのだ」、[註13] と説明する。

変身は明らかに意識と無意識の分裂を暗示している。この苦悩を抱いて彼は脱出口や家族との新たな結びつきを求める絶望的な努力

を繰返す。しかしそのつど拒絶されて失敗する。ここに至ってカフカの「変身」はまず家族物語として読まれるべきであることがはっきりする。変身を父親像と関連した懲戒の幻影であるとする考え方は[註14]以上の考察から皮相的で妥当性が薄いといわざるを得ない。

二

カフカはこの物語を三章に分けて構成している。第一章は変身にたいするグレゴールの反応と家族の受けるショック、そして続いて起る結果を扱っている。彼はなるほど肉体上の不快を感じてはいるが、変身を何か馬鹿気た事のように考える。寧ろ彼の頭を占領しているものはセールスマンとしての平均的生活とそれに付随する日常的な歓びや心配事である。彼はあたかも変身していない人間のように振舞う。自分の現在の状態を病気とも災難とも感じない。困惑し、救助を求めようと考えながらもグレゴールは微笑を禁じ得ない。だが彼にとって滑稽と思われることが周囲の人達には全く逆の作用をする。定刻に事務所に現れないグレゴールの責任を追求しようと支配人が訪ねてきてから、この状況はいよいよ強まる。支配人は甲虫をみるなり驚きのあまり言葉もなく後退する。母親はスカートに顔をうめ、床に座りこむ。父親は憎々しげに拳をかためる。続く描写はグレゴールの他人に理解を求めようとする絶望的な努力と周囲の拒否との間と不一致、読者の心をえぐる不協和音を暴露する。彼の言葉は人間の言葉として理解されなかった。内容のない動物の声としてうつろに響くのみである。動物的な身振による言葉は再三誤解される、逆に、動物の姿はしているが彼は他人の言葉を理解する能力はもっている。その間のコントラストがグロテスクな、時に悲痛な滑稽を生む。変身者が自分自身のことよりも家族の幸福を心配すればするほど、彼は途方にくれる。グレゴールは彼の家族にたいしてすでに悲しい重荷となってしまった。

そしてこの章は力づくで部屋に追い戻そうとする父親に追われ、充分開ききっていない扉で横腹に傷を受けながら戻り行く息子の姿をもって終る。横腹に受けた傷。これは「田舎医師」の少年が受けていた横腹の傷を想い起こさせる。「田舎医師」の物語ではその傷が人間の存在にたいする実存的な意味を持っていたことは疑う余地がない。「変身」の傷ついた動物も事実肉体的でなく、精神的に傷ついた人間を意味している。又それは社会的に認められた、正常といわれる平均的な人間ではなく、隣人のない、家族から圧迫され、加うるに父の権威によって無限の苦しみをなめる無名の人間を意味している。

第一章が一日の物語を扱っているとすれば、第二章はまる一ケ月の物語を扱っている。グレゴールは新しく起る様々な制約を甘受しなければならない。彼の頭を悩ます問題は家族の経験的な幸福と妹のこと、彼はこの妹を音楽学校で勉強させてやりたいと思っている。しかし何もかも諦めねばならぬ。結局は恥辱と悲しみが残るのみである。「五年前、一家が破産に追い込まれたとき、グレゴールはその悲運をできるだけ早く家人に忘れさせるため身を粉にして働いた。仕事の成果である現金を家へ持ち帰り、喜ぶ家族の前に並べてみせることができた。後にグレゴールが優に一家を支えることができるほどの金を儲けてもあの素晴らしい時期は、昔の輝かしさとともに戻ってくることはなかった。家族もグレゴールもそれに慣れっこになり、金を受取る側にも、金を投げ出す側にももう殊更に気持の籠もったという感じはなかった。」(E.102)

破産した父にはグレゴールが考えていたよりも多くの金が残されていた。それに父はまだ働くことも出来た。体も見かけほど弱っていなかった。グレゴールの犠牲は意味のないものだった。仕事の世界が個人生活を侵害していたのだ。一切は所有 Haben を基礎としており、存在 Sein を基礎としているのではなかった。(箴言三五。所有 Haben はない。あるのは存在 Sein だけだ。——を参照)

家族の平和な生活一切は偽りであり、何処にも真実はなかった。

時と共にグレゴールは自分の姿を人目に晒すのを嫌がるようになる。一人で兄の世話をした妹も配慮を怠りがちとなる。家具の運びだしを妨害しようとしたグレゴールの醜い姿を見て失神した母も今となっては息子が再びもとの姿に戻るという期待を棄てなければならない。母の失神の原因を知った父親はこの動物の背に林檎を投げつけ重傷を負わせる。グレゴールの思い出の中にある父はナイト、ガウンを着て、安楽椅子に腰かけていた。古いマントにステッキ姿で散歩している昔の父親の姿は今はもう消えていた。その家族にたいする社会的責任が再び父親の肩にかかってきた。絶大な力を得た父親の声の響の中には、全父権の絶対的権威が含まれている。F.D. Luke はカフカの父親コムプレックスを指摘し、自己の自己抹消に起因する父親のドラマチックな地位回復を強調する。[註15]

ここでも林檎による傷のもつ象徴的意味に注意すべきであると思う。なぜなら、このようにして惹き起された負傷こそ疑もなく内的自我の苦しむ精神的事件として意味されているからである。

第三章は労働に疲れた家族の状況を叙述する。その家族には経済的援助者としての息子が欠けてしまった。今では家族の一人一人が

仕事をもち、忙しい日を送っている。家族は息子を棄てて顧みない。グレゴールは屢々待遇の悪さに腹をたてる。

この章は最後にもう一度破局を迎える。それはグレゴールが部屋の隔絶から脱出したことから生ずる。それをさせたのは間借人を楽しませようとした妹のヴァイオリン演奏であった。グレゴールの意見によれば、妹の演奏は間借人に充分真価を認められていない。本当に理解しているのは自分だけだ。今、兄は妹を連れて来て、彼の部屋で一緒に暮したいと思う。彼の恐ろしい姿ははじめて役立つ筈であった。彼は自分の部屋のすべての扉の背後に同時に居て外からの攻撃に対して妹を守ってやりたいと思った。妹は無理に連れて来なくとも、すすんで彼のもとにとどまり、彼女は彼と並んで寝椅子に座り、彼に耳傾ける筈であった。彼は妹を音楽学校へ入れようと、家族には内緒で計画していた。この不幸が襲って来なかったら、今年のクリスマスの時にこのことを家族全員に告げる積りであった。この説明を聞いたら妹は感動してわっと泣き出すに違いない。そうしたらグレゴールは妹の肩まで伸び上って頭に接吻するだろう。自分が費用を払って妹に音楽学校で勉強させてやりたいというこの比較的無邪気な計画は今やもっとプリミティブな形をとり積極的な衝動の中に表現される。疑もなくエロチックな心像は明白である。[註16] 変身の起らない世界においては、これら一切は情愛のはげしいたかまりではあっても、依然ノーマルである。しかし我われがここに戦慄すべき、グロテスクな描写を感ずるということは、いまわしい甲虫への変身という虚構的に導かれた事実に慣れ親しんでしまった、という事実による。ここにカフカの文体の暗示力がある。しかし兄と妹の二人きりの城を築こうとすることは夢の観念ではあっても可能な現実ではない。今では家族が、この妹すらもが決心し、息子の、兄の名前を拒否する。妹は父にいう。「放り出しちゃうのよ。他にどうしようもないですもの。これがお兄さんのグレゴールだなんていつまでも考えているからいけないんだわ。」(E.135) 彼はもう追われることもないが、家族は黙って悲しげに彼をみつめている。グレゴールが部屋に戻るとすぐに扉は閉じられ、鍵が下ろされる。かくして家族の意識から次第に抹殺される。家族には信じがたいことだが、この甲虫についての家族の憐れみも、愛情のない会話もこの変身者にはよく理解できる。その彼が家族を思い、愛情をもって想い起すとき、彼に残された道はただ一つ、ひっそりと死を願うだけである。

三

家族にとって彼の餓死は――動物としての〝Es〟の死は幸福と解放を意味するだろう。事実この物語は苦しみを意味した家庭からとび出して早春の陽を浴びて戸外へハイキングする場面、新しいよりよき未来にたいする家族の楽しい計画を以て終っている。息子が死んで、もう何の問題もなくなった家族、その家族全員にとって息子の変身した存在は謎に包まれた世界を意味するに違いなかった。母と妹は心からグレゴールを愛していた。変身直後に彼等がみせるグレゴールへの配慮は感動的である。この小説の恐ろしい真実は人間間の美しい、愛に満ちた関係もまた欺瞞の上に成り立っているという洞察である。例えば、両親はグレゴールの心の葛藤や、彼が両親のために払った犠牲については予感もしない。「両親は一切をよく理解していなかった。彼等はすでに永いことグレゴールがこの仕事で将来も暮しをたててゆくものと信じ込んでいた。」(E.89) 彼等は「就職口」によって人間の本質が歪められ、破壊されるとは予感すらしない。息子の変身した存在に目を向けてみることは単に彼等の力に余ることであったばかりでなく、まだ一度も思案したことがなかった事柄である。従って彼等は彼等の救われた、だが平凡無意味な生活を続けることになる。なぜなら存在の無気味さは息子の死と共に永久に去ってしまった。

物語の終りの部分では、「断食芸人」にみられるように人間存在の精神的な面に基づく弱さにたいして生命的なものがコントラストをなしている。[註17]「断食芸人」の中で若い豹が純粋な反省を伴わない生活を具体化しているとすれば、ここでは妹に関して、彼女は美しく、女らしい娘に成長し、両親は彼女のために誠実な男を探し、彼女に未来の夢を托そうとする、と語られる、ついには兄を家族の意識から除くことにいちばん努力した妹は死ではなくて、生のために生れたのだ。そのことがひかえめに展開されているのは明瞭である。しかしだからといって変身の中に彼が生き続けることができなくなったという存在の弱さを構成しているカフカ自身の反対感情両立的態(アムビバレンツ)度を看過ごしてはならない。[註11]

これに対し妹の心の中には生き続ける力が生れる。これなくして人間の生活は完全にまた不能へ、従って不条理へ落ち込む。ここにみられるように両面の決裂、つまり家族拒否、及び隔絶された自我の挫折が起ると、同時に、生きて生活する希望は完全に失われ、こう

した生活のうちでの変身はもはや新生も再生も意味せず、意味するものは全体からの個人の脱落であり、結果的に導くものは自己破壊の衝動である。ここにカフカ文学の典型的な姿と指針が見出されるように思われる。

註1 Deutsche Literatur in unserer Zeit. Göttingen 1959 に収められた Wilhelm Emrich の論文 S. 72

註2 Wilhelm Emrich : Franz Kafka, S. 22
この場合 Helmut Richter は Friedrich Beißner 及び Benno von Wiese を同時に高く評価する。

註3 Martin Walser : Beschreibung einer Form 書名の示す通り徹底した Form の研究である。

註4 Friedrich Beißner : Der Schlacht von Babel, S. 55

註5 Friedrich Beißner : Der Schlacht von Babel, S. 6
及び Triedrich Beißner : Der Erzähler Franz Kafka, S. 5

註6 H. S. 11

註7 Wilhelm Emrich : Franz Kafka, S. 122

註8 Wilhelm Emrich : Franz Kafka, S. 122
エムリッヒが仕事と家族によって圧迫される人間の状態を説明するのに対し、仕事を嫌い人間としての使命を拒んだ人間には毒虫の姿が相応しいという Helmut Richter の説は理由が明確にされずこれだけでは説得力がない。

註9 日記一九十三年二月十一日

註10 日記の各所にみられるが特にこれを強調するのが Hofmannstahl. F. Kafka, Zwei Vorträge von Josef Mühlberger S. 335
其他 Beißner. Emrich 等殆んどの研究家の触れる問題である。

註11 Franz Kafka Today Edited by Angel Flores and Homer Swander Madison 1962 に収録されたF. D. Luke の論文 P. 32

註12 Benno von Wiese : Die deutsche Novelle II. S. 331

註13 Wilhelm Emrich : Franz Kafka, S. 120

註14 Franz Kafka Today 前掲論文 P. 25

註15 Franz Kafka Today 前掲論文 P. 27

註16 Benno von Wiese 前掲書 S. 341 及び Franz Kafka Today 前掲論文 P. 39

註17 Benno von Wiese 前掲書 S. 343

註18 Benno von Wiese 前掲書 S. 343

テキストからの引用は Fischer 版のカフカ全集による。
H. は Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande
E. は Erzählungen und kleine Prosa の略である。